

女子美

No.161/2008

E. KASAI

- 2P テキスタイルデザイナー 藤原克己さんトークイベント
- 4P 写真家 石内都さん特別講義
- 7P 南島教授に聞くプラハ・トリエンナーレ
- 8P 女子美キャリア★カーニバル2008
- 10P フィンランド協定大学教員による訪問授業
- 11P 女子美生Y's北京コレクションにスタッフとして参加
- 12P クローズアップ©ACP
- 13P EFA選抜メンバーが朝日広告賞最終選考上位者に
- 14P 「curtain<私>と世界の始まり」報告
- 15P 女子美アートミュージアム展覧会情報
- 16P 東京メトロ東京駅のアートウォール完成 他
- 17P トイレアートプロジェクト2008 他
- 18P 「銀座ギャラリー女子美」オープン 他

お詫びと訂正

女子美術大学
総務企画部広報課

広報誌 No.161 において下記の記事に誤りがありました。ここに訂正いたしますとともにお詫び申し上げます。

9 ページ

「女子美キャリア★カーニバル 2008 レポート」

—JOSHIBI CAREER CARNIVAL 参加者の感想—

誤：

芸術学部デザイン学科 1 年 齋藤あゆみさん

今回このイベントで、いくつかの講座に参加しました。そこで思ったのは、「自分のまわりにはいろいろな世界があるんだ」ということです。将来は、広告関係の会社でグラフィックデザインに携わってみたいと思っているのですが、正直なところ、どの企業もどの職種も魅力的に感じてしまいました。自分は一人しかいないので、自分に合った世界に入れるように頑張りたいです。

芸術学部デザイン学科 1 年 佐藤奈々瀬さん

将来、出版関係への就職を目指していますが、今回さまざまな方のお話を聞いてみて、「自分に信念があればどんな仕事をしていても輝けるんだ」と思いました。輝いている自分であれば、何歳でもチャレンジすることができるんですね。私はまだ 1 年生ですが、サリダ・アドの太田さんの話を聞いて、社会人として輝くために、日常の中で「人間力」を意識していこうと思いました。

正：

芸術学部デザイン学科 1 年 佐藤奈々瀬さん

今回このイベントで、いくつかの講座に参加しました。そこで思ったのは、「自分のまわりにはいろいろな世界があるんだ」ということです。将来は、広告関係の会社でグラフィックデザインに携わってみたいと思っているのですが、正直なところ、どの企業もどの職種も魅力的に感じてしまいました。自分は一人しかいないので、自分に合った世界に入れるように頑張りたいです。

芸術学部デザイン学科 1 年 齋藤あゆみさん

将来、出版関係への就職を目指していますが、今回さまざまな方のお話を聞いてみて、「自分に信念があればどんな仕事をしていても輝けるんだ」と思いました。輝いている自分であれば、何歳でもチャレンジすることができるんですね。私はまだ 1 年生ですが、サリダ・アドの太田さんの話を聞いて、社会人として輝くために、日常の中で「人間力」を意識していこうと思いました。

以上

Report ● 1 女子美アートミュージアム(JAM)／トークイベント フィンランド・ニューヨーク・日本のテキスタイルを語る

5月17日～6月29日までJAMで開催された、「北欧の夢 ニューヨークの洗練 日本の情緒 脇阪克二テキスタイルデザインの世界—女子美コレクションを中心に—」は、かつてないほどの多くの来場者で賑わっていました。その関連企画として行われたトークイベントにも、定員50名のところ450名を超える応募が殺到し、急遽広い会場に変更するほど大盛況となりました。

テキスタイルデザイナーの脇阪克二さんのほかに、画家の小松修さん、食文化研究家の堀井和子さん、日本刺繍家の三原佳子さん、進行役に芸術学部工芸学科の大澤美樹子教授を迎え、テキスタイルを中心とした文化や生活についてお話をいただきました。

24歳で日本を出発 退屈だったフィンランドの生活

脇阪：僕がフィンランドへ行ったのは24歳の時。それまでは日本で5年ほど、テキスタイルデザインのスタジオにいました。住み込みで、朝から晩までテキスタイルデザインを描く。それが嫌だったわけではないけれど、全身でぶつけられるようなモノがないかな、とっていたんです。外国へ行けば何かあるかもしれない、と。フィンランドのマリメッコは日本にいた時から知っていたので、できればそこで働きたいと思ってました。5点ほど持っていった作品を見て、「給料はあげないけれど、1ヶ月間働いて、もしよかったら採用してあげる」と言われ、大喜びしましたね。それがスタートです。その後、採用してもらって、8年間マリメッコで働きました。

小松：脇阪さんがフィンランドに行かれた頃は、シベリア鉄道や貨物船のようなもので行く時代でした。気持ちだけで行けるような状況じゃなかったと思うのですが、どうしても海外でやってみたいという思いは、どこから湧いてきたのですか？

脇阪：自分の中にある何か突き上げてきて、どうしてもやりたくなってしまふことがあるんです。それに押し出されて決断するというような感じで、フィンランド行きを決めたんだと思います。

大澤：脇阪さんは「フィンランドでの滞在は死ぬほど退屈だった」っておっしゃっているのですが、あこがれのマリメッコに入ったのに、退屈だったのですか？

脇阪：マリメッコの仕事は非常にやりがいのある仕事でした。しかし、住んでいたへ

ルシンキは、最初に街を見てまわったときから8年間過ごしてもほとんど変わらなかつたんです。僕は京都の街で刺激を受けながら育ったので、刺激のないフィンランドでは毎日何をしたいのかわからなかつた。会社も1年で7～8点のデザインが採用されればよかったので、そんなに忙しいわけでもない。でもその退屈な8年間のおかげで、僕の奥底にある自分自身が、徐々に育っていったんだと思います。

大澤：10月の半ばから雪が降り始めるフィンランドでは、1年の半分以上を暗い中で生活します。だからこそ室内のインテリアは明るいものが多いのですが、マリメッコの布などを実際に生活に使っている堀井さんはどう思われますか？

堀井：1980年代の北欧ブームから見てきましたが、それまでのテキスタイルと違うのはやっぱり「色」ですね。同じ色でも微妙に表現が違い、魅了されてしまいました。
大澤：日本でもマリメッコのお店が増え、北欧人気が高まっていますね。



左から脇阪克二氏、三原佳子氏、小松修氏、堀井和子氏

脇阪：北欧の魅力は「原点のものを作ろうとしている」ことではないかと思うんです。フィンランドという国は、ベーシックがあって+αがない国。日本は+αがあってベーシックがない国だと思うんです。そのフィンランドのベーシックが、日本にとって魅力的なんじゃないかなと思うんです。

大澤：脇阪さんがマリメッコから学んだものは、何だったのでしょうか？

脇阪：自分が本当にやりたいことを、本当にやってもいい、ということです。マリメッコの創業者からよくこんなことを言われました。「Be Yourself」。あなた自身でありなさい。自分自身であっていいんだ、ということをお学びましたね。



marimekko時代の作品「Karuseili」

マリメッコからラーセンへ 充実のニューヨーク時代

大澤：マリメッコ社を辞められて、ニューヨークのジャック・レノア・ラーセン社へ移ったときのことをお聞かせください。

脇阪：ニューヨークへ行ったのは、フィンランドが退屈だったから。それともう一つは、マリメッコがあまりにも偉大だったから。自分からマリメッコを抜いたら、何も残らないんじゃないかって気がしたんです。マリメッコの脇阪克二じゃなくて、脇阪克二って何なんだろう？ と自分自身のアイデンティティみたいなものを、もう一度確認したかった。ニューヨークを選んだのは、退屈じゃない、刺激にあふれたところに惹かれたからです。ラーセンというのはインテリアファブリックを作っている会社で、デザイナーやデコレーターにしか売りません。業界の中では、お金の糸目をつけない高級品を作っているところですよ。

大澤：マリメッコのような色柄物から、ラーセンの静かで繊細なプリントに突然移られて、戸惑いはなかったのですか？



ジャック・レノア・ラーセン社時代「Epergne」の原画

脇阪: マリメッコはどちらかといえば色を対比させて見せていくのですが、ラーセンは、色を近づけるだけ近づけて、その中でハーモニーを見せていくというやり方ですね。確かに最初は、ほかのデザイナーが微妙な色の話を細かくしているときに、色の違って実際にそんなにあるのかな? と随分戸惑いました。でも、非常にやりがいがあるハイレベルな仕事だったので面白かったですね。三原さん、ラーセンと着物の感覚って、やっぱり似てると思いますか?

三原: 色合いの近いものの合わせ方は、着物にも共通しますね。日本刺繍でも、「この色とその色の中間色がほしい」と思うことがよくあります。そういう場合は、12本からなる刺繍糸を1本ずつ分けて、色を混ぜて作ります。そうすると、微妙なグラデーションになります。

小松: ラーセンでの作品は、繊細で静けさがあり見ていて気持ちが安らぎます。音楽に近いと感じましたね。僕は絵を描くたびに短いストーリーをつけるのですが、脇阪さんのテキスタイルにも、シンプルな形の中に、研ぎ澄まされたストーリーを感じます。

大澤: フィンランドとアメリカでは、テキスタイルのデザインへの考え方に違いがありますか?

脇阪: アメリカのテキスタイルデザインは、基本的に保守的ですね。テキスタイルだけではなく、インテリアも古い感じがします。アメリカ人は移住をして自由を求めてきたので、自分の原点である家庭に対する憧れがすごく強いのかもかもしれませんね。

自然と身についた日本の感性 SOU・SOUが目指していくもの

大澤: 日本では、ワコールインテリアファブリックのお仕事をされていましたね?

脇阪: ラーセンやマリメッコは、世界的に

有名な会社でカラーが確立していましたが、ワコールはまだできたばかりの会社でした。そこでどういうものを作っていかは、ワコールのインテリアファブリックの方向性を作ることになると思うので、かなり必死にやっていましたね。ただ、日本では、「これが日本のインテリアデザインだ」というものは、まだはっきりと出てないと思います。西洋的なカーテンなどは日本の家に必要なのだろうか。もっと日本には違う形のインテリアがあるんじゃないかと。

堀井: 昔の日本家屋はともかく、今の日本のマンション建築や内装って、かなり暗中模索。サッシの色ひとつをとっても、なぜこの色なのかと思うことがあります。カーテンもオーダーする時、山がなく平らにしたいと言ったら「それはおかしい。ドレープをいっぱいとりなさい」と言われました。



女子美の校章をモチーフに脇阪氏がデザイン。手ぬぐい、くびまき、小巾折(袋)を女子美オリジナルグッズとしてSOU・SOUにて製作。

三原: 私もドレープのついたカーテンは嫌いです。今は窓際に棒を下げ、のれんのように無地の布を何枚か通しているだけです。

脇阪: やはり、日本人の美や文化に対する感性は、すごく高いと思います。世界の中で日本ほど、職人の民族というのはない。日本人は職人として生きていくときに、一番美しく生きていけると思います。物作りが非常に高いレベルになると、それが美とか文化の世界になる。そういう力を持った民族だと思っています。

三原: 日本文化の衣食住、どれも世界に誇れるものだとは思いますが、衣の部分がー



大澤 美樹子 教授

番身近なものではなくなっている。私としては現代的な感覚で、日本の衣のいいところを伝えていきたいと思ってます。脇阪先生のSOU・SOUは、日本の衣の楽しい部分を伝えているので、若い人にも人気ですね。

脇阪: SOU・SOUは、納豆であるとか味噌であるとか醤油であるとか、みんなが日常的に使うものを目指して作っています。日本人としてはすごく美味しいと感じるものであり、絶対必要なもの。それは外国の人にとっても魅力的だと思う。そういう大衆文化として浸透していくものにしたいなと思っていますのです。



テキスタイルデザイナー 脇阪 克二

1944年、京都市生まれ。1968~76年マリメッコ社、1976~85年ジャック・レノア・ラーセン社のデザイナーとして在籍。1976~96年(株)ワコールインテリアファブリックと契約。現在、SOU・SOUテキスタイルデザイナー、京都造形芸術大学美術工芸学科染織テキスタイルコース客員教授。



画家 小松 修

1948年、東京生まれ。現代童画大賞、ポロニャ国際絵本原画展入選など、数多くの賞を受賞。現在、現代童画会常任委員、デジタルイメージ会員、美術大学講師。「黒いスーツのサンタクロース」、「ともしびの木」、「魅惑の集団自殺」(装幀)など作品多数。



食文化研究者 堀井 和子

1954年、東京生まれ。料理スタイリストとして活動後、NY郊外で3年間暮らす。シンプルなパン、お菓子作り、センスあふれるスタイリングで人気が高い。著書に「テーブルのメニューABC」「パンに合う家のごはん」など多数。



日本刺繍家 三原 佳子

1968年東京生まれ。女子美術短期大学服飾科刺繍教室卒業。日本刺繍家の栗田敬子氏に師事。「Maru Factory」「マル着物工場」主宰の丸山正氏のデザインに刺繍を刺し、2000年ミラノきものコレクションを展開するなど、新しい刺繍表現に定評がある。

Lecture ● 写真家 石内 都 氏特別講義 「ひろしま Strings of Time」



石内 都 氏

6月5日、写真家の石内都さんと東京都現代美術館の学芸員の笠原美智子さんをお呼びして、大学院の芸術表象研究領域の学生を対象とした特別講義がおこなわれました。石内 都さんは2005年の第51回ヴェネツィア・ビエンナーレの日本館の展覧作家で、「mother's 2000-2005-traces of the future」という展示で約13万人の入場者を集めました。その日本館のコミッショナーとして石内さんを選出されたのが笠原美智子さんでした。講義はヴェネツィア・ビエンナーレの様子を映像でご紹介いただいた後、「Mother's」と新作の「ひろしま」について、杉田敦准教授を含めた3者でトークをおこなう形で進められました。その一部をご紹介します。

遺品との対話「Mother's」

杉田：「Mother's」という作品はお母さんの遺品を撮った作品ですね。僕は石内さんが遺品を撮るかどうかでかなり逡巡されていたのを覚えています。

石内：「Mother's」という作品ができた一番大きなきっかけは、母とうまくコミュニケーションがとれていなかったことなんです。何かうまく関係がもてない。そう思っているうちに、彼女が亡くなってしまっただけです。そんなときに彼女の使っていたモノたちがどんどんどんどん箆筒の中から出てきた。そうか彼女はもういないけれど、身に着けた下着とか口紅とか、これと対話をしよう、遺品と対話をしようと思って。肉体はないんですけど、母の使っていたモノが平然と目の前にあるという現実。これを捨ててしまう前に、写真に撮っておこ

うかなと。発表しようとか作品をつくるのかいうつもりではじめてたのではなくて。どこにもいない母親の喪失感。彼女はどこにもいないから仕方がないので残されたモノとどうやって私はこれから関係をもっていくかと、そういう意味での写真撮影だったわけです。

杉田：笠原さんがヴェネツィア・ビエンナーレの日本館に石内さんを選ばれた経緯は？

笠原：写真集を新宿のギャラリーで見せてもらったとき、「わあっ」ときたんですね。私は作品を観るのが商売なので、いつも作品はたくさん観ていますが、「わあっ」とくる作品は少ないんです。そして個展でやりたかったんですね。一人を押し出す方が強いんですね。それから女性作家でやりたかった。さらに写真でやりたかったんですね。日本館ではこれまで写真家は3人くらいしか出ていなかったと思います。

「今」を撮った「ひろしま」

杉田：この「Mother's」の延長上に今回の新作があるということですが、どちらも「遺品」であるということ以外にどんなつながりがあるのでしょうか？

石内：「ひろしま」を撮った直接のきっかけは頼まれ仕事だったんです。「広島を撮らないか」と声をかけてきた編集者がいて。「ヒロシマ的なものはどんどん風化してきている」「もうアートしか残らないんだ」と言われて。「ヒロシマ的なもの」を撮るなんてことは私には一生ないと思っていたところに、そういう話がきて、一週間くらい考えました。私自身は反戦平和的な「ヒロシマ」には興味がなかったんです。でも遺品たちを



笠原 美智子 氏



目の前にしたとき、私とともにある時間とか空間に「生きていたんだね」というのは変ですけど、「ここにいるんだ」と感じて。それと、思いのほか色彩がきれいで、デザインがとってもモダンで。絹のものが多いんですけど、被爆しているにもかかわらず、ちゃんと残っている。私は「今」を撮ったわけです。私にとっては現在、「今」を撮る意味において、遺品たちと出会っている。「Mother's」で母の遺品を撮りながら、対話を重ねるうちに、何かこう、広島に母が連れて行ってくれたような気持ちで、興奮状態でこれらを撮りました。何か、「待っていてくれた」みたいなね、そんな声が聞こえた感じです。



撮影したのは肌身に直接身につけたものが中心です。ワンピースもそうですけど、本当に色彩がきれいに残っていて。63年前の原爆の日のものかと。人間は死んでいるわけですけどものたちは目の前にあって、何かこう共通の時間をもっている。そういう意識で撮ってきたんです。実は私自身は一個一個の物語にはまったく興味がなかった。だから寄贈された方のいつ、どこで、というのは写真集にもまったく載せていません。いわゆるヒロシマ的ドキュメンタリー記録とは考えていないんです。去年1年間は私の作品として私物化して成立していく過程でした。

笠原：「ひろしま」の作品は、ものすごく美しい。本当にきれい。きれいだから悲しい。染み入るような悲しさが伝わってきます。原爆で亡くなった方たちがこのままこうやって残っているわけですね。みんなモンペを着て「ぜいたくは敵だ」だった時代に、モンペの下には精一杯おしゃれをしていたわけです。

「Mother's」については、一般化してみると「娘」と「母」という関係だと、お母さんが一人の「女性」として、性的身体をもった「女性」とはなかなか見えにくい。けれど「Mother's」は同じ女性としての感受性、性的身体をもった女性としての「母」・「記憶」というのが見えてくる。いろんな観点からそれぞれの国の人が個人的なストーリーに反映させることができると思います。「ひろしま」もそういう意味で、確実に生きていた一人一人の個性が、今私が生きることと同じくらいに重く、同じ価値を持っているということを浮かび上がらせる作品です。



「Mother's」は男女で観たときの反応が違います。「Mother's」を観たときの男性は自分自身のお母さんを一人の女性として捉えづらいようです。

石内：「ひろしま」に対しても写真展への反応はいろいろありましたが、正確に取材してくれているのは女性でした。男性は、重い日本の歴史の中の広島というものの、いわゆる「ヒロシマ」の呪縛から逃れられないのではないのでしょうか。女性の場合はずっと、「ああ、こんなに綺麗なものを身につけていたんだ」、「おしゃれをして、綺麗なもの着たいという、今を生きる私たちとなんら変わらないじゃない」と、そういうふうに乗ってくれる。広島には原爆という重い重い事件を、世界最大級の傷を受けた街として、ある種の差別があるのではとすら思いました。被爆した人たちはこういう服を身につけていたにも関わらず、誰もそれを知らない。私たちと変わらないのにそう思っはいけないような。そしてヒロシマ、ナガサキの写真はこれまでモノクロでしかなかったわけです。私は今回カラーとモノクロの両方で撮りました。それでも「原爆」というテーマから逃れきれない現実があります。6月28日から広島市現代美術館で写真展をやりませんが、いろんなことが起きるかもしれないと思っています。そう簡単にこの写真が受け入れられるとは思えなくなってきていて。すでにオープニングでお酒は出さないとと言われて。「何で？」と思うんですが、「『ヒロシマ』がテーマだから」と。

「Mother's」への拒絶反応

杉田：「Mother's」といえば、「写真の会賞」を取られましたよね。あのとき僕は選考委員の側にいたんですが、「Mother's」への反応が微妙なんです。写真の内容以前に受け付けない人が多くて。内容でなくともっと幼稚なところで拒絶反応があって、会話ができませんよ。



杉田 敦 准教授
(大学院 美術研究科/芸術学部基礎教養系)

石内：私の写真はパッと見ていわゆる美しいとか、楽しいとか、明るい感じが無いわけです。拒否する人はたくさんいますけど、これはとてもいい反応だと思うんです。私としては表面はどうでもいい。もっと目に見えない何か、痛みとか傷とか負のエネルギーを私は写真にしてきましたから。それ

※掲載作品は、全て「ひろしま」より



をわかる人がいるわけです。見たくないという人は私の作品を本当にわかっている人です。

笠原：「Mother's」に関しても「ひろしま」に関しても高度な批評ならいいんですけど、杉田さんもおっしゃったような、もっと本当に幼稚なマザコン男の反応があるんだと思うんです。僕のお母さんだけは「女」じゃなくて「お母さん」であるという。非常に男性に都合のよい古き良き時代をまだひきずっているという。

杉田：石内さんの写真に関しては、「Mother's」以前は結構マッチョな写真だと思えます。ものすごくハードエッジで、フレームも決まっています。僕には「男の子の文法の中で頑張っているな」という感じに見えた。その目から見ると、「Mother's」以前の写真というのは男性にとっては理解する枠組みに入れやすかったんだと思うんです。

石内：おっしゃる通りです。意図を読めなくなったんだと思えます。実は私の初期の3作というのは粒子がざらざら。もうハードでどうしようもないハードロックみたいな感じなんですけど、それを評価してくれた人たちは、「1・9・4・7」以降、私が傷を撮り始めてからまったく評価しないんです。逆に初期の3作には興味がなかった人の方が評価してくれる。

「ザ・ヒロシマ」とは違うアプローチ

杉田：最初に「ひろしま」という作品を撮っていることを聞いたとき、僕は「Mother's」を超えられないかかもしれないと思いました。撮影も手持ちでラフだし。

本当に写真をしっかり撮ろうとしたらもっと大判のカメラで撮ると思う。しかもオートですよ。でも作品は非常にカラフルなものすごくかっこよくて、まさに今生きているもののように見える。広島に関しては、軽さのようなものが不謹慎だという意識があって、難しい部分があると思うんです。先ほどお二人も言われていたように、「ザ・ヒロシマ」というある種の事件になるとアンタッチャブルなものになってしまう。ぼくらの延長上に彼らがいんだという当たり前の事実が忘れ去られてしまう。この鮮やかな色彩をみていると、まさに自分たちの生活の延長上に「ヒロシマ」があったんだということを感じさせてくれる。これまでも広島を撮った写真家っていうのはたくさんいますけど、それとはまったく違うアプローチです。

笠原：これまで撮った人たちは全部男なんですよ。あんまり一般化したくないんですけど、個人的な見解で撮っているか、それとも誰のものでもない「ザ・基地」、「ザ・ヒロシマ」というのを正義感や観念的なところから入って撮っているかの違いなんだろうという気がします。石内さんはまったく観念の人じゃないのよね。男たちは「ザ・基地」、「ザ・ヒロシマ」を撮ろうとする。

石内：私は去年の1月にはじめて撮影で広島に行ったときに原爆ドームを見たんですよ。それまで映像でしか見ていなかった。そうしたら「ああ、こんなにちっちゃくて、こんなにかわいいのか」と思って。だからいかに原爆ドームのイメージが肥大化して



伝わっているか感じましたよ。「ヒロシマ」そのものがあまりにも日本人にとっては重くて、風化させてはいけぬ、一生忘れてはいけぬ、そういう広島象徴が原爆ドームなんだと思っていたの。でも実際はとてもかわいくて、けなげに立っているように感じたんです。それで私は広島を「撮れる」、と思った。遺品たちは人々が亡くなっても、永久不滅に残っている、そういう使命を帯びている。遺品たちと対面したときにがんばってね、という気持ちを感じたんです。そういうふうにいままで広島を見た人がいなかったのだと思う。これが何かのはじまりかもしれないなあと。いつでも誰でも広島平和記念資料館に申請すればこの資料は見るができますから。どんだんみんなに見てほしいですね。



石内都 いしうちみやこ

<プロフィール>

1947年生まれ

木村伊兵衛写真賞、東川賞国内作家賞、日本写真協会賞作家賞など受賞

個展・グループ展多数

パブリックコレクション：

アリゾナ大学クリエイティブ写真センター／カナダ国立美術館／サンフランシスコ近代美術館／チューリッヒ美術館／ニューヨーク近代美術館／ヒューストン美術館／メトロポリタン美術館／ロスアンゼルス州立美術館／川崎市市民ミュージアム／国立国際美術館／東京国立近代美術館／東京都現代美術館／東京都写真美術館／徳島県立近代美術館／横浜美術館／国際交流基金／北海道東川町フォトフェスタ／ヨーロッパ写真館

<「ひろしま」の展覧会>

「石内都展 ひろしま／ヨコスカ」

会期：2008年11月15日(土)～2009年1月11日(日)
月曜、12月28日(日)～1月5日(土)休館

開館時間：10:00～18:00

会場：目黒区美術館

※掲載作品は、全て「ひろしま」より

先生のお仕事から覗く美術界・デザイン界 南 宏 教授に聞くプラハ・トリエンナーレ2008



芸術学部芸術学科で教鞭を執る傍ら、キュレーターとして国際的に活躍されている南 宏教授。つい先日までおこなわれていたプラハ・トリエンナーレ2008(2008年6月3日～9月14日)のキュレーターを務められました。今回はプラハ・トリエンナーレについての南 宏教授のお話を通して現代美術の世界を覗いてみたいと思います。



300人以上集まったオープニングの様子。白髪の男性が館長のミラン・ニジェック氏。

—どんな特徴のある国際展だったのでしょうか？

南 宏：現在の世界の国際美術展というのは、最も権威のあるヴェネツィア・ビエンナーレの構造ややり方を踏襲して開催しているといえます。プラハ・トリエンナーレの場合には一人のディレクターシップに支配されることなく、世界各地から選ばれた15人のキュレーターがそれぞれに自由なことができました。様々な思想をもったキュレーター、そして、年齢的にもヒエラルキーがなく、とても自由な雰囲気の中で仕事をすることができました。主催するプラハ・ナショナル・ギャラリーの館長がまた大物なのですね。自身もアーティストなんですが、「Art Kills Art」つまり「芸術が芸術を殺す」というメッセージを美術展の壁

に館長自らが描いたりするわけです。「情報に踊らされるな」ということが今回の一つのテーマでしたから、このメッセージにキュレーター自身が大きな挑発を受けることになりました。

—「情報が芸術を殺す」とはどんなことを意味しているのでしょうか？

南 宏：『Flach Art』というイタリアの世界最大の美術雑誌がありますが、2006年までプラハで開催されていた「プラハ国際現代美術ビエンナーレ」はこのメディアと一緒に主催していたものでした。しかし、『Flach Art』のやり方を商業主義に偏っているとする批判がプラハ・ナショナル・ギャラリーにあって、独自の路線で開催することになったのが今回のトリエンナーレだったわけです。『Flach Art』が作家を特集すれば、その作家の作品の値段も高騰するし、世界の美術館がその作家の展覧会をやる。世界の多くのビエンナーレ、トリエンナーレは美術雑誌の情報だけで成り立っているといってもいい状況です。そういう『Flach Art』がつくり出した世界が今のアートの世界になってしまっている。例えば、東欧のアートなんて長い間誰も注目してこなかった。私は1993年から東欧の旧共産主義圏の現代美術をリサーチしてきましたが、その驚くべき過激な歴史がメディアに取り上げられたことはほとんどありません。つまり、ないに等しいものとして扱われてきた、すばらしい芸術がいかに多いかということなんです。『Flach Art』に代表されるメディアがある価値を捏造しているだけであって、それだけが真実ではないんだということを主張する。そういう要素も持っているのが、今回のプラハ・トリエンナーレではなかったでしょうか。

—今回先生は、4名のアーティストを「クール・フレーム」というテーマで選ばれましたが、この「クール・フレーム」とは？

南 宏：今回のトリエンナーレの大きなテーマというのは「Rereading of the Future」、「未来の再読」でした。もう一度、世界そして歴史を読み直すということですが、そのためのフレームは、何かのために奉仕するフレームではなくて、どんな対象がフレームの中に入ってこようと、その真実を見逃さない、見落とさないようなフレームでなければならない。「クール」というのはそ

のある種の冷静なクライテリアの質感を表そうとしたものでした。私たちはフレームなくして世界を認識することはできません。しかし、私はその定義ではなく、そのフレームの質感に導かれる真理の現れに注目したいと思ったのです。4名のアーティストを日本、韓国、ドイツ、ポーランドから招待し、映像、写真、ドローイングの作品を展示することになりました。

森村泰昌(日本)

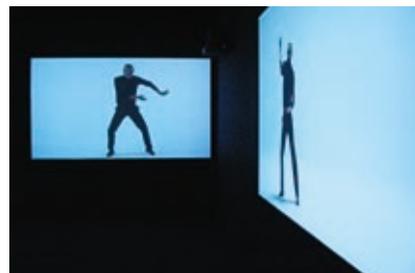
「Requiem: Humanity is sadly futile」
(レクイエム—人間は悲しいほどにむなしい)



「アーティストである森村泰昌さんが実際にレーニンに扮し、現代のレーニンとして世界の虚しさを演説するというビデオ・インスタレーションなんですが、大衆の役に扮するのは、本物の大阪の釜ヶ崎のホームレスのおじさんたちで、森村レーニンの演説に対する、資本主義の犠牲者である彼らのシニカルな反応は、私たち自身の気持ちを代弁するものであり、滑稽であると同時に、世界の無意味さについて深く考えさせられることになる作品です。

崔在銀(韓国)

「喜怒哀楽」



「真っ暗な部屋の四面の壁に、『喜怒哀楽』を表現したパフォーマンスを映すという映像作品です。室内にはメキシコの作曲家とコラボレーションによって作られた重低音が響いています。私たちには社会主義の国には社会主義の、資本主義の国には資本主義の喜怒哀楽があるかのような錯覚がありますが、喜怒哀楽という原初的な人間の感情の現れは、何物にも支配されない。そうした次元に人間を回復させていく、戻していく。そんな願いを込めて作られた瞑想の部屋ということができるかもしれません。」

※誌面の都合上2名の作品を紹介していますが、この他に教授はドイツのヨーク・ガイスマール氏、ポーランドのスズニグエフ・リベラ氏を招待しました。



約6000人の女子美生が参加!

女子美生の卒業後の進路は、美術・デザイン系の企業への就職だけでなく、進学やプロの作家として制作活動が続けるなど多岐に渡ります。そのため、1、2年生のうちから自分の進路（キャリア）を考え始めることで、制作や勉強の上で具体的な目標を持てるようになります。社会にはさまざま

まな業種や職種・業務があり、あまり知られていない仕事もあります。それらを知って、将来や進路の可能性を広げるためのイベントが、キャリア支援センター主催の「女子美キャリア★カーニバル」です。

7月30日から8月2日の4日間に渡ったこのイベントでは、毎日朝10時から夜の8時まで、23もの講座や企業説明会、講演会を開催。1年生から4年生まで、延べ5959人の女子美生が参加しました。会場となった相模原キャンパス2号館の教室は毎回満席状態で、真剣な表情でメモを取ったり、積極的に質問をする学生も多く、女子美生のキャリアへの関心の高さが伺えました。

第一線で活躍するプロたちの講演

企業説明会にはアニメやゲームなどの制

作会社やアミューズメント企業、アパレル会社に出版社など、たくさんの企業の方が、実際にどんなことを仕事としておこなっているのか、現場の声を聞かせてくれました。また特別講演会として、ドラマや映画制作の美術デザイナーやプロのアーティストなどの講演もあり、業界の貴重な話を語っていただきました。

さらに、個人のスキルアップを目的としたマナー研修や模擬面接、小論文対策講座などもおこなわれ、これから始まる就職活動の準備を体験。将来を考える上でのヒントがたくさん詰まったこのイベントで、具体的な夢と目標を見つけることができたのではないのでしょうか。夢に向かって大きな一歩を踏み出す、きっかけとなったイベントとなりました。

7月30日（水）

イベント1日目は、業種・職種まるわかり講座から始まり世界的に有名なアニメ制作会社、玩具・おもちゃメーカーによる企業説明会、マナー研修がありました。また、女子美の卒業生である株式会社サリダ・アド代表取締役社長の太田みどりさんによる特別講演会では、仕事をする上での心構えやアドバイスなど、女性ならではのメッセージを送っていただきました。

株式会社サリダ・アド 太田みどり氏講演会

輝ける将来のために「人間力」を磨こう

私は女子美を卒業後、広告代理店でグラフィックデザインの仕事をしたり、宣伝広報部の仕事を経験しました。それから結婚をし、仕事を辞め、子どもを産みましたが、37歳の時に、未経験の営業スタッフとして再スタートしたんです。当時は、子持ちの女性が働くには大変な時代でしたし、子どもはまだ1歳だったので、保育負担のある会社に入社しました。それから何とか頑張って営業成績を上げ、いつの間にかいろいろな役職に就き、2005年には社長に就任することができました。

みんな、私を見て「若い」と言ってくれるのですが、恋をするのも仕事をするのも、キレイになる近道としては同じなんですよ。一本、自分の筋を通すことで、輝き続けることができるんです。私の信条は、「いくつになっても、物事に情熱を持って輝いていたい」ということ。輝ける自分の将来を作



るのは、自分自身なのだから。皆さんの中には、「30歳になった頃には素敵なお大人の女性になりたい」と思っている人も多いでしょう。でもね、現実には30歳を過ぎると「いい年して」とか言われちゃう（笑）。20代をどう過ごすかで、30代が決まっていく。さらには、30代をどう過ごすかで、40代が決まっていく。今は「家庭の中だけでなく社会に出て働いてもっと輝きたい」と、思っている女性が多い時代です。これから大学を出て、自分の足で自立していけると思いますが、就職はある意味“生き方の選択”。将来輝くために、ぜひ学生のうちから人間力つまりは体力、知力、能力、精神力、心の力、コミュニケーション能力を磨いておいてください。

サクセスウーマンになるために

この「人間力」の中で特に大事なのが、コミュニケーション能力です。「はい」という素直な心、「すみません」という反省の心、「おかげさまで」という謙虚な心、「させて頂きます」という奉仕の心、「ありがとうございます」という感謝の心。この5つの心を

持っていれば、人間関係は良好です。皆さんは美大生ですから、才能を大いに持っていると思いますが、それだけでは社会では通用しません。才能・仕事・人間力のバランスが大事。だから「私は芸術肌だから人のことなんて関係ない」と思っている人は、就職しない方がいいかもしれませんね。企業に属するということは、人の中で動いていくこと。いくら才能があっても仕事ができても、企業の中ではうまくやれないでしょう。「就職したいな」と思っているなら、ぜひバランス感覚を養ってほしいと思います。

仕事で成功したサクセスウーマンたちには、必ず共通していることがあります。それは、「夢を持っている」、「ポジティブ思考」、「途中であきらめない」、「自分が好き」、「人が好き」という方たちです。夢がある人は頑張れるし、人も集まってきます。いつも前向きな人は必ず成功します。自分が好きな人は自分を裏切りません。あきらめない人は信念を持って壁を乗り越えます。人が好きな人は感謝の心を持っているので、他人の協力を得ることができます。



これを実行するのは若いうちはまだ難しいと思いますが、早いうちにこういう意識・気付きを持って過ごしていくことは大切なことです。そして、経験に勝るものはありません。これから大勢の人に会って、どんどん人間力を磨いて、ステキな社会人を目指していきましょう。

○ Profile

株式会社サリダ・アド

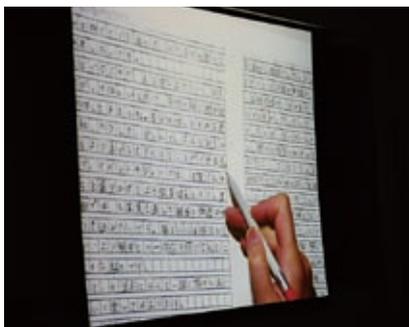
代表取締役社長 太田みどり

37歳から、1歳の子どもの育児と仕事を両立しながら、未経験営業マンとしてスタート。その23年間の経験の中で生まれた“エイジフリー”のコンセプト「年齢やその人を取り巻く環境に関係なく、働く人の意欲や人間力があれば良い仕事はできる」をもとに、女性求人情報誌「サリダ」

を編集・発行している。2005年10月社長に就任。2007年4月に“女性のための”人材紹介業「フォーダブル」の立ち上げを始め、同月『フォーダブル BLOG』、11月に『フォーダブル転職』をOPEN！これからはいろいろな形で働く女性を応援したいと日夜奮闘している。その他、女子大学、各企業、行政で女性を対象とした講演活動をおこなっている。

7月31日

イベント2日目は、文具・オフィス家具製造会社、ゲームメーカー、キャラクター事業の企業などの企業説明会、TVや映画等の美術デザイナーの講演会、ヘアメイク講習が行われました。また、就職試験では避けて通れない小論文の書き方や、模擬グループ面接体験の講座も開催されました。アドバイスや指導を直接受けながら基礎を学ぶことで、就職活動への自信にもつなげることができたようです。



小論文の書き方講座



模擬グループ面接

8月1日

イベント3日目は文具メーカー、大手家電メーカー、出版社、アミューズメント企業、子供服メーカーと、バラエティに富んだ職種の説明会がありました。自動車メーカーによるインダストリアルクレイ（デザイン用粘土）を使った立体デザインの体験講座では、自分のスキルが仕事に生かせることを実感。就職活動に向けたヘアメイクの講習会も盛況でした。



立体デザイン体験



ヘアメイク講習会

8月2日

イベント最終日は、美術雑誌の編集長、コスメメーカーのデザイナー、海外でも活躍中のプロアーティストの講演会が開かれました。第一線で活躍する方々のお話に、女子美生もわくわくしながら聴講していました。また、就職試験で実施されることの多いSPI・筆記試験の体験講座も開催。自分の実力を試し、さらなる飛躍につながる有意義な体験となりました。



特別講演会



特別講演会

JOSHIBI CAREER CARNIVAL 参加者の感想

芸術学部デザイン学科1年 齋藤 あゆみさん

今回このイベントで、いくつかの講座に参加しました。そこで思ったのは、「自分のまわりにはいろいろな世界があるんだ」ということです。将来は、広告関係の会社でグラフィックデザインに携わってみたいと思っているのですが、正直なところ、どの企業もどの職種も魅力的に感じてしまいました。自分一人しかいないので、自分に合った世界に入れるように頑張りたいです。

芸術学部デザイン学科1年 佐藤 奈々瀬さん

将来、出版関係への就職を目指していますが、今回さまざまな方のお話を聞いてみて、「自分に信念があればどんな仕事をしていても輝けるんだ」と思いました。輝いている自分であれば、何歳でもチャレンジすることができるんですね。私はまだ1年生ですが、サリダ・アドの太田さんの話を聞いて、社会人として輝くために、日常の中で「人間力」を意識していこうと思いました。

○キャリア支援センターからの声

美術やデザインの知識や技術を生かしたお仕事はたくさんあります。活躍する方々のお話から、将来への夢や目標をもつことで女子美での日々を充実したものにしてほしいと考えました。特定の業界に偏らないよう、できるだけ親しみやすい(誰でも知っている)企業に参加を願ひし、就職だけではなく作家・アーティスト志望の学生のための企画も用意しました。参加したプログラムで吸収したことが、学生のクリエイターとしての意欲を高めていると感じています。それぞれが、その意欲を制作に生かし、日々成長することを期待しています。

International ● ① フィンランドの協定大学教員による訪問授業

本学はエプテク応用科学大学アート・デザイン学院（フィンランド、現ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学、以下エプテク）と2006年6月に学術交流協定を締結し、学生交流（延べ9名の相互派遣・受入れ）と教職員交流（延べ8名の相互派遣・受入れ）を積極的に推進しています。今回、同学院のキルシ・ニイニマキ先生を外国招聘特別講師としてお招きし、2008年6月2日から同11日の間、芸術学部工芸学科染コースおよび織コースで訪問授業を開催しました。先生は現地でテキスタイル・デザイン専攻の主任講師として活躍されており、授業は実践的なデザイン・ワークショップとなりました。

エプテクでは、学生は常に「市場に向けてどのようにデザインを提案するか」を念頭に作品を制作しています。授業では、フィンランドのテキスタイルに関するスライド写真を見ながら、まずは両国の発想の違いが示されました。続いて、他者を意識したテキスタイル・デザインがどのような工程を経て構築されていくのか、機能性、必要性、価格的な考慮などの条件を取り入れた作品制作とは何か、テキスタイルがどのような手順で市場に出回るのかなどをめぐって、現地の様子が報告されました。次に、学生はこれらの講義内容を自分の意図する作品と結びつけて、各自がムードボードから出発してデザイン制作に入りました。先生の指導やアドバイスを受けながら制作を進め、最終日の講評会ではデザインを持ち寄って発表し、最終コメントを受けました。

(国際センター)

工芸学科訪問授業を終えて

キルシ・ニイニマキ

今回、日本でこのような貴重な体験をすることができ、とても嬉しく光栄に思いました。女子美の学生たちは頑張り屋で、そしてなによりも、新しいことを学ぶということに強い意欲を持っていました。文化的な背景の違いから、授業の進め方にはフィンランドと日本の間で多少の違いがありました。フィンランドでは学生は課題の初期段階から学生自身で考えることが強く求められます。プロフェッショナルな立場でのデザインとプレゼンテーションに対応できなければなりません。同時に彼らは、課題に関して自分自身で決断する自由が与えられています。そのほか、一クラスあたりの学生数が少ないので教員から学生一人一人へのフィードバックやアドバイスを与えやすいという点もあります。一方日本では、一部の学生は初期段階で教員からの詳細な指示を求めているという感じを受けました。また、一部の学生にとって最終日のプレゼンテーションは容易ではなかったように見受けられました。学生の英語力も両国の違いの一つではないでしょうか。



最終日の先生を交えた講評会



フィンランド流のデザイン教育を体験して

芸術学部工芸学科染コース2年 山崎 菜穂子さん

この授業はムードボードやイメージボードを作ることから始まり、デザインを考えるというものでした。北欧デザインはイメージやその出発点を大事にしていると感じました。ボードを制作することでコンセプトやイメージは伝えやすくなり、その先の意見交換ができました。私はさらにこのデザインを膨らませたり、異なる用途を発見したりと多くのことを学びました。

芸術学部工芸学科染コース3年 赤津 瑛美さん

ムードボードを作りそこからスケッチをしてデザインに起こすという作業工程が今までにない経験で、とても新鮮でした。今回の授業では、「デザイン制作は商品化を目指すことが前提であること」を知りました。それと同時に、言語の壁を越えて自分の考えを伝えることの難しさを実感し、また、先生のお話を聞いて遠い国フィンランドが以前よりリアルに感じられました。この体験を今後に活かしていきたいと思います。

International ● ② 米国女性美術館の法人諮問グループへ加盟

本学は2008年2月に米国女性美術館（National Museum of Women in the Arts、アメリカ・ワシントンD.C.）の法人諮問グループへ加盟しました。同美術館は女性芸術の展示、保存、収集、研究、その功績の 대중教育において世界で最も著名な機関として知られています。その活動に賛同し、円滑な運営を支持する企業・団体（23機関）で構成される「法人諮問グループ」において、本学は米国企業・団体以外で唯一のメンバーとして参画することになり、日頃から推進している世界レベルでの女性芸術家の育成と支援をさらに充実します。

今回の加盟の背景には、本学が「芸術に

よる女性の自立」、「女性の社会的地位の向上」、「専門の技術家・美術教師の養成」を建学の精神として創立された高等教育機関であることが挙げられます。これらの建学の精神は、まさに同美術館が目指す女性芸術のあり様と趣旨を同じくするものであり、本学は同美術館の未来に向けた発展に大きな期待を寄せています。

同美術館はこれまで、日本人女性作家を特集した展覧会を数多く開催しています。その中には、本学卒業生で女性洋画家として初の文化功労者となった三岸節子氏の回顧展（1991年）もあります。

(国際センター)



米国女性美術館

International ● 3 Y's北京コレクションにスタッフとして参加



©MONICA FEUDI

4月24日、芸術学部ファッション造形学科客員教授である山本耀司先生のファッションショー、Y'sコレクションに、ファッション造形学科12名の学生がフィッティングスタッフとして参加しました。これは「学生にプロの現場を体験させたい」との山本先生のご好意により実現したものです。

ショーの舞台となったのは中国北京市労働人民文化宮（太廟）。ここはユネスコ世界遺産に登録された故宮（紫禁城）に隣接した建物です。

参加した学生の感想文をご紹介します。

大学院 修士課程 デザイン専攻
ファッション造形2年 平沢 みゆきさん

4月24・25日、Y's北京コレクションのフィッティングスタッフとして参加するために、ファッション造形学科3・4年生、修士2年生から計12名のメンバーが北京へ飛んだ。会場は世界遺産に登録された故宮である。バックステージでは、出番を待つY'sの服たちと完璧なスタイルのモデルたちがスタンバイし、ヘアメイクの方や社員の方が慌しく各自の仕事をこなしていた。そこは熱気で溢れ、圧倒された。私たち学生スタッフの仕事の分担が決まり、緊張が高まる中ショーが始まった。次から次へと出入りするモデルの着せ替えを時間の中で終えることに専念し、無事フィナーレを迎えることができた。さっきまでの張り詰めた空気がウソのように、その場は笑顔と拍手でいっぱいになった。ハードなスケジュールであったが、私たち学生にこのような貴重な機会を与えてくださるヨウジヤマモト氏の考えに感銘を受けた。そしてプロスタッフに混ざって仕事をする経験は、ファッションを学ぶものにとって大きな財産となった。約30時間の旅を終え、北京での経験を反芻しながら、今、それぞれが新たな制作に打ち込んでいる。



©MONICA FEUDI



参加したファッション造形学科の学生たち

International ● 4 第三回北京ビエンナーレが開幕

7月9日、中国国立美術館で第三回北京ビエンナーレが開幕されました。世界中から747点が出品されたこのビエンナーレには本学短期大学部で非常勤講師として教鞭を執られている小林裕二先生の作品が出品されました。また、開幕式には国際美術家連盟の執行委員である本学名誉教授の入

江観先生が出席され、ビエンナーレに合わせて開催された国際シンポジウムには芸術学部芸術学科教授の南島宏先生が出席されました。



International ● 5 女子美アートミュージアム(JAM)／スライドレクチャー 「フィンランドにおけるファブリックの歴史」

6月6日、JAMでの「協阪克二テキスタイルデザインの世界」展の開催に合わせ、本学の学術交流協定大学であるフィンランドのエプテク応用科学大学アート・デザイン学院（現ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学文化学部）の主任講師を務めるキルシ・ニイニマキ氏を迎え、スライドレクチャーを開催しました。ニイニマキ氏は昨年フィンランドのタンペレのヴァプリッキ博物館で開催されたフィンランドのプリント布の歴史についての展覧会の企画と総指揮をされた方です。工芸学科をはじめとする多くの学生のほか、学外からも多くの聴講者が集まりました。

レクチャーは、1800年代後半に民芸として発達したリュウイユについてのお話には

じまり、フィンランドの紡績業の成り立ちについてや、プリントテキスタイルの工業生産においてプリント技術がどう発達していったか、また物資の不足する1940年代の戦時下のアーティストの創意工夫について、さらにその後フィンランドの工業デザインを隆盛させるきっかけとなった復興努力についてなど、50年代までにどのようにしてテキスタイルデザイナーの仕事が確立し、役割が大きくなっていったかについて説明がありました。さらに、小さなテキスタイルプリント会社だったマリメッコが世界的な現象となり、揺るぎない存在となるまでの経緯や、大きな柄からミニマリズムへの70年代の流行の変化、80年代にポストモダニズムがデザインに与えた影響な

どについて、90年代には発展途上国への生産拠点の移転や、生産におけるコンピュータの使用など繊維産業に多くの変化があったことが紹介され、今世紀に入るとデザイナーは専門領域を越えてコラボレーションをはじめたこと、またデジタルプリントが広く使われるようになったことなどが語られて締めくくられました。



Close up ● クローズアップ③ ACP(アーティストークリティック プログラム)



ACPとは

ACP(アーティストークリティック プログラム)とは、女子美生から募集したアーティストが作品のプレゼンテーションを行い、それを大学院芸術表象ゼミ生がクリティック(批評)するというプロジェクトです。

発足のきっかけは、昨年度の大学院芸術表象ゼミの授業でのこと。女子美にはたくさんの学科があり、たくさんの作品が誕生しているにもかかわらず、アーティストが作品を発表し、プレゼンテーションをする場が少ない現状があるということ。同時に、理論をもってアートにかかわろうとしている学生にとって、実践の場がないという現状が話題となり、「アーティストとクリティックが相互に交わり、刺激し合える場を」と、大学院芸術表象ゼミ生によって立ち上げられたプロジェクトです。

このプロジェクトにはいくつかのプロセスがあります。まず、アーティストによる作品のプレゼンテーション。次に、プレゼンテーションに対してのクリティックによる批評。そして「批評の批評」。「批評の批評」とは、広く意見を交換し、批評家も批評されるというオープンディスカッションの場です。昨年の「批評の批評」には、ACPの参加者のみならず、学年・学科を越えた多くの学生が参加し、様々な意見が飛び交いました。

今回は、批評家という立場と同時に、企画・運営を行う大学院修士課程芸術文化専攻芸術表象ゼミの3名に話を聞きました。



倉茂なつ子さん、松本ももこさん、前池有香さん
(修士1年) (修士2年) (修士1年)

プレゼン、講評、そしてコミュニケーションの場

今年からこのプロジェクトに参加する倉茂さんは、アーティストにとってプレゼンテーションの必要性をこう語っています。「実は、私は工芸学科出身で、今でも創作活動を続けているんです。理論系に方向転換したということではなく、これからは作家にとっても理論的な知識、プレゼンテーションスキルは求められてくると感じています。学外に自分の作品をアピールし、作品発表のチャンスをも自分自身でつかむためにも、しっかりとしたプレゼンテーションスキルが必要だと思えます。」

また、「ACPは学科の垣根を越えてコミュニケーションの場、情報交換の場になっているので刺激が多い。」と、話すのはデザインを担当する前池さん。ACPの広告は、前池さんをはじめとするACPデザインチームによって考案されます。アーティスト募集が行われた6月下旬、大きなQRコードの描かれた印象的なポスターを女子美のいたるところで目にする事ができました。また、アーティスト募集の2週間、ACPスタッフが同じデザインのTシャツを着て自らが広告塔となりました。この広告のコンセプトは「伝えない広告、伝えないTシャツ」。このデザインにはACPについてなにも書かれていません。「隠されたほうが気になる」「あえて見せない」というユニークなアイデアで、昨年を上回る定員いっぱいアーティストが集まりました。

昨年プロジェクトに参加し、今年は代表を務める松本さんは、このプロジェクトが着実に女子美に浸透してきているという手ごたえを感じているようです。「授業での講評会では、気心知れた先生方、友達にかこまれて、多くを語らずとも理解してもらえます。プレゼンテーションの機会はほとんどないという声を参加者からよく聞きます。今年は、昨年参加したアーティストが改めて参加する姿も見られますし、学内にこのような場を求めているアーティストはたくさんいるのだと思います。」

女子美と学外をつなぐパイプ役になりたい

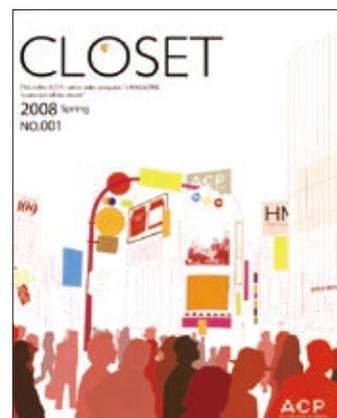
今年で2年目を迎えるこのプロジェクト、昨年より更にプログラムも改善されました。

たとえば、プレゼンテーションで支持を得たアーティストには、ACPが展覧会を企画、開催をすること。また、ACPの全プログラムが終了した後に作成する冊子「CLOSET」にも、新たな要素が加わります。学科を越えた交流の場、更には女子美と学外をつなぐパイプ役になりたいというACPメンバーの思いから、作家のインタビューや展覧会の情報など、多くのひとに親しまれる内容を検討中とのこと。ACPが情報の発信源になることができればと意欲いっばいに語ってくれました。



QRコードの描かれたTシャツを着て受講するACPスタッフ

当初、大学院芸術表象ゼミの授業の中で誕生したこのプロジェクトですが、現在はプレゼンテーションの場、講評の場を求める多くの参加者が集まり、自発的な学生による自立したプロジェクトになりつつあるとのこと。この9月にはアーティストによる作品発表、そして秋にはオープンディスカッションが予定されています。みなさん、のぞいて見てはいかがでしょうか。



プログラムの中でアーティストがおこなったプレゼンテーションの一部とそれに対するクリティックの批評をまとめた冊子。無料配布。

ご請求先 広報入試課
TEL:042-778-6123
E-mail:prs@joshibi.ac.jp

【ACP HP】

http://www.geocities.jp/a_c_program/

Topics ● ① EFA選抜メンバーの作品が朝日広告賞の最終選考上位に!

女子美では『EFA Advertising Study Program』として、実践的な広告制作について学ぶプログラムを実施しています。このプログラムで最終的に選出された選抜メンバーは、講師の横山直人氏（広告プロデューサー）、山東崇之氏（グラフィックデザイナー）とのコラボレーション作品を朝日広告賞へ出品。プロの広告制作と同様に、アイデア出し、コピー制作、入稿作業など、講師の2人が細かく指導をおこなっていきます。07年には117名のプログラム参加者のうち、1名の作品が最終選考の上位に残りました。

【EFA】とは、全女子美生を対象に広告業界をより実践的に学ぶプロジェクトの総称です。「プロジェクトに参加することで広告の世界へ高く飛び立とう」という意味を込めて名付けられています。

【Engine Fantastic Airways】

Engine: ものを動かす原動力。女子美生の Engine となって力強く進むこと。

Fantastic: 作品を生み出す素晴らしいイメージ、他にはないオリジナリティ溢れる想像力。

Airways: 旅立ちへ向かう活動の道のりを滑走路から飛び立つ飛行機に重ねて表現しています。

■ EFAプロジェクト参加学生の声 【最終選考上位作品制作】

芸術学部メディアアート学科3年 新井 沙織さん

広告業界にとっても興味があったので、まずは自分の作品作りの基礎やプレゼン能力を鍛える場になればと思い EFAプロジェクトに参加しました。当初、私は選抜メンバーには選ばれず、とても悔しかったので、講師のお二人に「悔しいから個人でも朝日に出します！」と伝えました。そのやる気が通じたのか、後日、選抜メンバーに選ばれ、とても嬉しかったです。

私が EFAで学んだことは、どの作業においても「自分から何かアクションを起さなければ相手は反応してくれない。」ということ。お二人と積極的に連絡を取り合うことは勿論のこと、郵便局に行き郵便について詳しく聞くことや実際にスルメを郵便で送ってみることが今振り返れば大切な作業でした。「誰かから何かしてもらう」「言ってもらおうのを待つ」のではなく「自分から積極的に何でも言ってみること。」恥ずかしいとか怒られるとかは後で考えればいいのだと感じました。私は「食いついて離れない、嫌がられる学生」になりたい。プロになるってそういう一生懸命さから始まるのかな?と思います。

今回、賞は逃しましたが朝日広告賞の最終選考上位者に残り、たくさんのご褒美をいただきました。この素晴らしい EFAプロジェクトが女子美で行われているということは私の自慢です。私は今年もこのプロジェクトに参加し、もう一度朝日広告賞にチャレンジします!



【広告主】 日本郵政
【課題】 企業広告(郵便局)
郵便局を「来なければならぬ場所から来なくなる場所に」するための広告
CD: 横山直人(横)ブルドック所属
AD: 山東崇之(TUGBOATS所属)
D: 新井沙織(EFA選抜メンバー/芸術学部メディアアート学科3年※制作時2年)

【問い合わせ先】 キャリア支援センター
TEL: 042-778-4509

Topics ● ② 「横浜市こどもの美術展」に企画協力

横浜市民ギャラリーで7月23~28日に開催された「横浜市こどもの美術展2008」に、女子美術大学が企画協力しました。横浜在住・在学の子どもの作品が展示されるこの展覧会は、毎年開催されており、今年で43回目となります。

女子美術大学では、川口吾妻教授(芸術学部メディアアート学科)による障害児療育支援レインボープロジェクト「たっちゃんのコネク島」体験コーナー、ロダン体操考案者である高橋唐子助手(芸術学部絵画学科洋画専攻)による「スペシャルトーク」、原田松野教授(芸術学部ファッション造形学科)による「子どもの造形相談コーナー」、自由参加ワークショップ「みる・きく・さわる・あそびアート」を運営・実施しました。また、会期中には約30名的女子美生が、体験コーナーやワークショップのボランティアスタッフとして参加しました。特に

ワークショップでは、中村有希子さん(大学院修士課程デザイン専攻メディアアート造形1年)、小幡千絵さん、金澤綾さん(芸術学部ファッション造形学科3年)、伊藤ころさん、我妻真帆さん(芸術学部芸術学科3年)が準備段階から関わり、ゴミとして捨てられてしまうペットボトルやお菓子の包み紙などを素材に「くるくる」「ぱりぱり」「ふわふわ」なものを創作するという企画を作りあげました。ワークショップには1000人近くの子どもの参加し、会場にいる女子美生ボランティアと会話を重ねながら、ユニークな表現を生み出していました。子どもたち一人一人と向き合い、言葉を交わした女子美生の存在は、ワークショップに大きな成功をもたらしました。(女子美アートミュージアム学芸員 梅田 亜由美)



Topics ● 3

芸術学科の学生キュレーションによる展覧会 「curtain <私>と世界のはじまり」

芸術学部芸術学科では2005年度入学生カリキュラムに「アートプロデュース研究」が取り入れられ、4年次になると授業の一環として、女子美アートミュージアム（JAM）での企画展をキュレーションすることになっています。2005年度入学生が4年生になった今年、7月11日から27日の会期で学生企画による初めての展覧会が開催されました。展覧会名は「curtain <私>と世界のはじまり」。展示したのはJAMの収蔵作品で、すべてに布（カーテン）がかけられているため、観客が作品を観るためには自らのカーテンをめくるといったたらしかけが必要になります。「見ること」の「可能性／不可能性」を問うことをテーマとしながら、学生は、キュレーションの過程で自分自身と向き合い、ユニークな展示方法と文章で表現しました。

会期中、展覧会に合わせておこなわれた関連イベントの一つが、唐十郎氏と芸術学科の南高宏教授のトークショーです。この企画を発案したのは芸術学科4年生の杉本藍さん。6年前にはじめて紅テントで「泥人魚」を観たとき、唐十郎氏が自転車で登場した衝撃が忘れられなかったそうです。展覧会を企画する中であらためて自分と向

き合ったとき、「唐十郎氏を呼びたい」という思いから、3年前の秋公演「カーテン」を軸に、役者として、劇作家としての「見ることは何か」に焦点をあて、ぜひ講演していただきたいと依頼したとのこと。一方で、学生時代から状況劇場（紅テント）、天井棧敷、演劇センター68/71（黒テント）などを観ていたという南高宏教授は、そこに感じた「抗い」のテンションの高さが、芸術を見る一つの基準になったといいます。唐十郎氏からは過去の出演作品の一部を上映の後、演劇にこだわり続ける理由や「紅テント」だけを標榜していくスタンス、役者であり続けること、唐氏にとっての「見る」ことについてなど、貴重なお話をたっぷりと聴かせていただくことができました。



唐十郎氏



トークショー企画者の杉本さん

Topics ● 4

相武台高校×女子美生×JAMコラボレーション授業

女子美アートミュージアム（JAM）に来館した神奈川県立相武台高校・中山周二先生より「メディア論の授業でコラボレーションしませんか？」と声をかけていただき、高校近くの「グリーンパーク商店街」のお店のロゴマークを考えるという内容で“高校生×女子美生×JAM”のコラボレーション授業を実施しました。学芸員とともに高校で出張授業を行うサポートスタッフとして加藤真実さん、高木瞳さん、武田日菜子さん、土井利恵さん、塙恵理子さん（以上、芸術学部デザイン学科3年）が協力してくれました。

（女子美アートミュージアム学芸員 梅田 亜由美）

神奈川県立相武台高等学校 中山 周二先生より

学芸員の梅田亜由美さんから「地元商店街のロゴマークづくりはどうですか」と返事がきたとき、「これは面白そうだ」と思い

ました。しかも、メディアリテラシー、アート・コミュニケーションといったキーワードでリクエストをしていたので、ど真ん中にストレートの返事です。問題は生徒がくいついてくるか？

1回目のコラボ授業で心配は氷解しました。梅田さんの話「ロゴとは何か」でツカミはバッチリ。そして、ロゴマーク作りを経験した女子美生によるプレゼン、試行錯誤を経て1つのロゴに行きつくまでの苦労話は、生徒のモチベーションを大きく引き上げました。女子美生が考えた某食品会社のロゴ作品には「こっちの方が絶対いい！」と生徒から称賛の声も上がりました。

1回目の授業のおかげで、生徒たちは商店街での取材活動により緊張感で臨みました。そして2回目のコラボ授業。取材をもとに各自のロゴ構想を語る段階では、いい取材をした生徒がいい発表をしていました。



このことは当たり前のように実は稀有なこと。そもそも、みんなの前でまじめに発表することに抵抗感を覚える高校生は多いのですから。しかし、取材を終えた生徒たちは、お店の人の思いを感じて、それを発表の場で自分の言葉に置き換えて、みんなに伝えようとしていました。成績のためにやる発表ではこうはなりません。メディアリテラシーの授業としては大成功です。

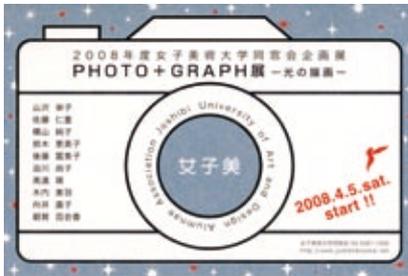
J A M ●●● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

JAM展覧会開催報告

2008年度女子美術大学同窓会企画展 PHOTO+GRAPH展—光の描画—

写真や映像などの光を使った描画アートの分野でクリエイターとして活躍する同窓生の作品を紹介しました。ロビーには、展覧会のプレイベントとして2007年9月に行われたワークショップで制作された作品や2000年代版ガリーフォト（来場者がカメラ付携帯電話やデジタルカメラで身近なものを被写体として撮影した写真）などを展示するために、買い物カゴで作られた印象的な形の参加型ブースが設置され、学生たちの人気を集めていました。

(4月5日～5月6日)



北欧の夢 ニューヨークの洗練 日本の情緒 脇阪克二テキスタイルデザインの世界 —女子美コレクションを中心に—

マリメッコ、ラーセン、ワコールインテリアファブリックで活躍したデザイナー・脇阪克二氏よりご寄贈いただいたJAM収蔵の布地や原画を展示しました。展示作業、レセプション企画、ワークショップ運営など、展覧会には多くの学生がボランティアとして協力してくれ、学生とともに作り上げた展覧会となりました。また、ミュージアムショップでは、相模原キャンパス内で全て撮影された展覧会カタログ、本展を記念して脇阪氏がデザインした「女子美オリジナル手ぬぐい」を販売し、話題となりました。

(5月17日～6月29日)



curtain <私>と世界のはじまり

「アート・プロデュース」の授業の一環として、芸術学科4年生のキュレーションによる当館収蔵作品の展覧会が開催されました。作品にはすべて布（カーテン）がかけられ、「見ることはなにか」という「見ることの可能性／不可能性」に迫ることをコンセプトに、学生45名がそれぞれ、担当作品をオリジナリティあふれる手法で展示しました。会期中はトークセッション、小学生ワークショップ、ジャズや和太鼓のライブなどのイベントが実施され、手作りのお菓子がサービスされました。学生考案によるオリジナル展覧会グッズの売れ行きも好調でした。

(7月11日～7月27日)



JAM展覧会予告

平成20年度 女子美術大学 女子美術大学短期大学部 退職教員記念展

平成20年度をもって退職される赤沼國勝先生、木下道子先生、見城美子先生、嶋剛先生、高間夏樹先生、瀧本英男先生、立石雅夫先生の展覧会です。

(9月17日～10月26日)

造形さがみ風っ子展

相模原市教育委員会主催による小・中学生の作品展です。

(10月30日～11月3日)

※収蔵作品の整理に伴い、2008年11月4日～2009年3月8日は長期休館いたします。

女子美ガレリア ニケ展覧会報告

女子美ガレリア ニケとは：若手女性作家を中心に、女性をテーマとして作家や作品などを取り上げるだけでなく、教員のプロデュースによる企画や、教員をはじめ芸術学部・短期大学部、同窓生から公募した企画を中心に、展覧会、パフォーマンス、ワークショップ、トークショーなどを開催しています。

2007年度 文部科学省選定 特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)活動報告展覧会 学生が地域社会と協働し、地域の安全、教育、環境などの問題解決に取り組む実践型教育プログラムの活動報告展覧会。

(4月4日～5月9日)

2008年度女子美術大学同窓会企画展 PHOTO+GRAPH展—光の描画—

4月にJAMで開催された展覧会の巡回展示。

(5月13日～5月24日)

岡本さとみ個展

短期大学部 別科現代造形専修

(現 別科 基礎造形専修) 2005年 修了
(5月28日～6月14日)

浜田涼 「忘却録」

芸術学部 絵画科 洋画専攻

(現 絵画学科 洋画専攻) 1989年 卒
(6月16日～7月5日)

葛西絵里香展 リノリウム・スキン

短期大学 造形科 情報デザイン専攻

(現 造形学科デザインコース 情報メディア系) 2002年 卒
(7月8日～7月25日)

textbook;

本学卒業生、教員からなる7人のアーティストによる「教科書」の展示。

(7月29日～8月9日)



▲「葛西絵里香展 リノリウム・スキン」のDMより。現在、雑誌などの挿絵を手がけるなどで活躍中の版画家。今号の本誌の表紙は葛西さんの作品です。

Topics ● 5 東京メトロ丸ノ内線東京駅のアートウォールが完成!

東京メトロ丸ノ内線東京駅のアートウォール「自由に走る丸ノ内線」(デザイン: 芸術学部メディアアート学科非常勤講師 中嶋ハルコ、山司千津子)の施工作業を2008年4月1日から開始し、約3週間かけて4月22日に東京駅ホームの銀座、新宿方面、池袋方面それぞれの壁面のアートが完成しました。

東京駅にふさわしく、親しみが持てるデザインによって、丸ノ内線東京駅を利用する人に、少しでも安らぎを感じてもらい、



癒される空間にしていくことを目的に、本学芸術学部と短期大学の学生、そして卒業生も参加して作成したデザイン案の中から、メディアアート学科非常勤講師 中嶋ハルコさんと、山司千津子さんの共同制作による作品が選ばれました。

「地下鉄を待つあいだ、目の前に明るく楽しい世界が広がっていたら」、そんな発想からこのデザインは始まっています。

テーマは「自由に走る丸ノ内線」。東京駅の特徴は、東京メトロの中で首都「東京」という名前を持つ唯一の駅であり、50年以上の「歴史」と、再開発によるニュームーブメントの中心でもある「トレンド」、そして特筆すべきは、皇居の正面に位置し、ほかの駅にはない四季を通して豊かな「自然」があることで、この「歴史」「トレンド」「自然」のキーワードを融合させることをコンセプトとしました。そのデザインは、江戸



文化や東京全体を象徴する名所などを登場させず、あくまでも「東京駅」にこだわったものをと考えました。豊かな自然の象徴である鳥を案内役に、さまざまな視点から、駅周辺景色のイメージを具象と抽象を織りまぜ、記号化した世界として、開いたドアの向こう側に描きました。

丸ノ内線東京駅を利用される方々の心の安らぎとなって、永く親しんでいただけたら幸いです。

(芸術学部 メディアアート学科 教授 山野 雅之)

Topics ● 6 北参道駅に吉武研司教授の壁画が設置

吉武研司教授(短期大学部造形学科美術コース教授)の作品『晴のち雨のち晴-宇宙樹-』が、6月14日(土)より開通した東京メトロ副都心線の「北参道駅」改札口に常設されました。長さ10m、高さ2m68cmの壁画は592ピースの有田焼の磁器でできた作品です。1300度、1000度、1000度、と3度焼成して完成した作品は有田焼ならではの強い彩度が特徴です。生流転を表現したという作品のモチーフになっているのは教授の生まれ故郷である佐賀の原



風景です。副都心線の8駅には吉武教授の壁画のほか、野見山暁治氏、絹谷幸二氏、木村光佑氏、千住博氏、山本容子氏、山口晃

氏、中山ダイスケ氏など著名なアーティスト12名による14点のパブリックアートが設置されています。

Topics ● 7 美術教育フォーラム2008開催

毎年恒例で開催されている「美術教育フォーラム」。今年も8月1日に「伝統文化と美術教育」というテーマで、国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議室で開催されました。小・中・高等学校の図画工作・美術科担当の教員や教員志望者など172名が参加しました。

主催者代表として小倉芸術学部長の挨拶があった後、第1部は佐野ぬい学長より、「絵を描くということ~色と形ともう一つ」と題した基調講演が行われました。午後からの第2部では、教育現場に携わる教員3名、また本学が参加している「えどがわ伝統工芸産学プロジェクト」より、江戸川区伝統工芸保存会会長、本学学生2名をパ

ネリストに、今回のテーマに即した事例発表がありました。続いて各パネリストのコメント、補足説明などが行われ盛況のうちに閉会しました。

- 基調講演講師 佐野ぬい(女子美術大学学長)
- パネルディスカッション パネリスト
 - 遠藤友麗(女子美術大学芸術学部客員教授)
 - 荒井康郎(千葉県柏市立豊四季中学校教諭)
 - 秋山有子(東京都町田市立忠生第一小学校教諭)
 - 深野晃正(江戸川区伝統工芸保存会会長、江戸川区指定無形文化財つりのぶ、萬園園主)
 - 佐藤奈津子(女子美術大学芸術学部デザイン学科)
 - 本間紗代子(女子美術大学芸術学部デザイン学科)
- コーディネーター
 - 佐藤善一(女子美術大学常務理事)
- 後援 東京都教育委員会
- 参加者172名の内訳: 小学校教諭15名、中学校教諭62名、高校教諭22名、特別支援学校教諭6名、大学生20名、本学教職員23名、その他24名



Topics ● 8 観音崎公園トイレアートプロジェクト2008

2007年度の『トイレアートコンテスト』による作品設置は、トイレ空間演出の点で高評価を得ました。

2008年も引き続き、2月に、神奈川県立観音崎公園の指定管理者である「横浜緑地・西武造園グループ」主催により行われ、デザイン学科4年生の豊島友美さんの作品が選考され、3月末に設置・一般公開されています。

今回は「花の広場トイレ」のトイレ内部空間に相応しいデザインで制作され、題名は、男子用が『SKY』、女子用が『SEA』

です。観音崎公園の自然と「でかける人を、ほほえむ人へ」という主テーマのとおり、明るく楽しいトイレになったと、利用者か

ら大変喜ばれています。ぜひ、見に行ってください。

(芸術学部 デザイン学科 教授 田村 俊明)



男子用トイレ「SKY」



女子用トイレ「SEA」

Topics ● 9 かながわグリーンハウス 壁面タペストリー完成

芸術学部工芸学科の瀧本英男教授と芸術学部工芸学科染コースの学生21名による、神奈川県立相模原公園かながわグリーンハウスの正面アール壁を装飾するボタニカル・タペストリーが完成しました。

これは、2007年度に壁面装飾プロジェクトとして神奈川県立相模原公園の指定管理者である財団法人神奈川県公園協会と株式会社サカタのタネグループ、そして本学との産・学・公の連携として取組まれたものです。グリーンハウスのコンセプトであ

る「健康と緑」「暮らしと緑」などに留意しながら、自然の素材を生かすことを第一に制作をおこないました。

21名の学生を9つの班に分けてスタートしましたが、9種類のタペストリーに統一感を与える配色に時間をかけました。タペストリーは、最大幅1m×長さ4mの9枚で構成されています。

学生の自由で柔軟な発想が開花したタペストリー植物模様は、温室内の熱帯植物のイメージや、豊かな光や水の透明感と良く

調和しており、一体感があります。

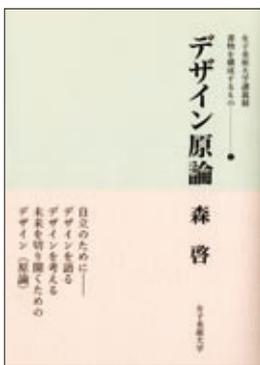
このボタニカル・タペストリーはかながわグリーンハウス内で見ることができます。



Topics ● 10 本学教員 出版著書 紹介

『デザイン原論』—女子美術大学講義録
書物を構成するもの③
森 啓 著
(本学大学院客員教授)

ISBN 978-4-88888-835-6
定価2,520円(本体2,400円+税)
A5判(口絵カラー8頁)本文284頁
刊行年 2008年6月
発行 女子美術大学
発売 日本エディタースクール出版部



内容紹介

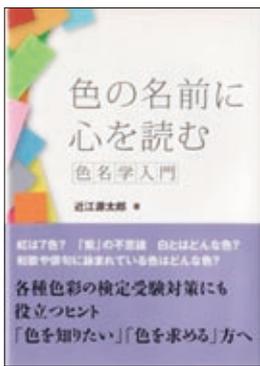
森啓教授が2006年に公開講座の形で開講した授業「デザイン原論」の内容を収めたものです。

【著書「おわりに」より】

デザイン界で生きていくために、現状の仕事の場では、何が必要であろうかという極めて素朴な発想から、おそらくは、自律し自立する心が必要であろうと考えて、そのためには、初心に立ちもどることがまず必要なことであり、さらに、デザインのいくつかの分野に共通する主題として、「衣食住」をとり上げたものです。

『色の名前に心を読む』—色名学入門
日本の色名の特徴を解剖した色名学入門書
近江 源太郎 著
(本学大学院教授)

ISBN 978-4-327-37721-2
定価2,100円(本体2,000円+税)
A5判 並製 176頁
出版社 研究社



内容紹介

虹は本当に7色なのか?日本人はどんな色名を知っているのか?和歌や俳句にはどんな色名が詠み込まれているのか?この本では色についての調査データをもとに、日本の色名の特徴を解剖した。しかし浮かび上がった特徴には、諸外国と共通する点が多い。色についての認識には人類に共通したメカニズムがはたらいっている。色彩科学、特に心理学の視点から色名を多角的に解析し、色名を通じて人間の心に迫った。

NEWS ● ① 大村智 理事長 レジオン・ドヌール勲章を受賞

このたび、女子美術大学理事長大村智氏がレジオン・ドヌール勲章を受賞いたしました。

レジオン・ドヌール勲章は、ナポレオン・

ボナパルトによって1802年5月19日に創設されたもので、軍人や文化・科学・産業・商業などの分野における民間人の卓越した功績を表彰すること目的としています。

叙勲式は2008年10月17日(金)フランス大使館にておこなわれます。

NEWS ● ② 奈良岡朋子氏へ名誉博士号を授与

昭和26(1951)年に本学をご卒業された奈良岡朋子氏に名誉博士号が授与されました。

奈良岡氏は、女子美術大学在学中に民芸芸術劇場(第1次民藝)の研究生となり、翌年、劇団員に昇格。現在に至るまで演技派女優として舞台をはじめ、テレビ、映画と幅広く活躍され、芸術文化の発展に大きく貢献されています。

(主な受賞歴等)

昭和44年 第4回紀伊国屋演劇賞 個人賞
昭和51年 第4回テアトロ演劇賞
昭和56年 第7回菊田一夫演劇賞
平成13年 第44回ブルーリボン賞助演女優賞
平成17年 第60回記念文化庁芸術祭大賞(演劇部門)
同 年 第47回毎日芸術賞(演劇部門)
同 年 朝日舞台芸術賞



佐野めい学長(左)と奈良岡朋子氏(右)

NEWS ● ③ 南薫宏 教授 第3回西洋美術振興財団賞「学術賞」受賞

第3回西洋美術振興財団賞「学術賞」を芸術学部芸術学科南薫宏教授が受賞されました。

西洋美術振興財団賞は、日本国内の美術館で開催される西洋美術を対象とした展覧

会のうちから、日本における西洋美術の理解と、文化交流の促進、また西洋美術研究の発展のため、顕著な業績があると認められた個人(学術賞)や団体(文化復興賞)に対して授与されるものです。

南薫教授は昨年担当した熊本市現代美術館「熊本国際美術展 ATTITUD2007 人間の家-真に歓喜に値するもの」での展覧会企画構成担当者としての成果が認められ受賞となりました。

NEWS ● ④ 『銀座ギャラリー女子美』オープン

このたび、歌舞伎座に近く、銀座昭和通りに面したビルの6階に「銀座ギャラリー女子美」がオープンしました。

第一回目は、開廊記念として7月14日から8月9日まで、大村理事長のコレクションである「大村コレクション展」から、片岡球子、三岸節子、大久保婦久子、三谷十糸子、森田元子の作品を展示しました。

「銀座ギャラリー女子美」
東京都中央区銀座4-10-6 永井画廊6階
次回の展示
女子美ゆかりの作家とその周辺①
橋本明治・弘安展
2008年9月1日(月)~11月1日(土)
11時~19時(休廊 日曜、祝日)



Topics ● ① 公募展受賞者紹介

第6回トーキョーワンダーシード2008 入選

石渡 頼子 (芸術学部絵画学科洋画専攻3年)
樋口 愛子 (芸術学部絵画学科日本画専攻3年)

題6回スペースデザイン学生コンペティション 銀座ヨシノヤ賞

鈴木 麻紗子 (芸術学部デザイン学科2年)
銀座かねまつ賞
新野 友里子 (芸術学部デザイン学科2年)

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎号無料でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先を広報入試課までご連絡ください。
また、広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。
《広報入試課》 TEL. 042-778-6123
FAX. 042-778-6692
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

お詫びと訂正
広報誌 No.160において下記の記事に誤りがあり、お詫びを申し上げますとともに、ご訂正願います。
23ページ「女子美アートミュージアム展覧会情報」
脇坂克二(誤)→脇坂克二(正)

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 企画部 広報入試課
制作・印刷 株式会社 日相印刷
監修 原田 松野
発行日 2008年9月25日